解説目録

永青文庫資料にみる

肥後の街道とその景観

南関町

湯町（山鹿）

二重坂

味取新町（植木）

大津町

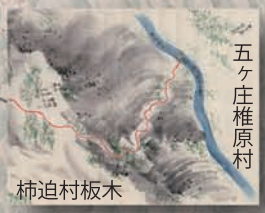
高森町

期間　平成 23 年 10 月 29 日（土）～10 月 31 日（月）
　　開館時間　9：30～16：30
会場　熊本大学附属図書館自由閲覧室
入場　無料

小川町

柿迫村白岩戸

南種山村


五ヶ庄椎原村
柿迫村板木

日奈久町

佐敷町

公開講演会・第 6 回永青文庫セミナー

永青文庫資料にみる肥後の景観の魅力 – 街道とその建築 –

講師　北野　隆（熊本大学文学部附属永青文庫研究センター特任教授）
日時　平成 23 年 10 月 29 日（土）14：00～15：30
会場　放送大学熊本学習センター講義室（附属図書館隣）
　　聴講無料、先着 130 名まで入場可

主催　熊本大学附属図書館・熊本大学文学部附属永青文庫研究センター
協力　公益財団法人永青文庫・放送大学熊本学習センター・「熊本城 400 年と熊本ルネッサンス」県民運動本部
後援　熊本日日新聞社・NHK 熊本放送局・RKK

永青文庫資料にみる

肥後の街道とその景観

熊本大学附属図書館には､所蔵や寄託の貴重資料が国指定重要文化財を含め数多くあります。それらの現物を見て頂くため、本館ではこれまで毎年秋に貴重資料展を開催し、すでに 28 回を数えます。

永青文庫資料は寄託のうち最大の 6 万点を超える資料群で、この中には約千点余の絵図・地図・指図（建築図）が含まれます。これらは細川家関係の領地絵図、合戦絵図、肥後領内の城下絵図、町や村の街道図、景観図、城郭や江戸屋敷・国許屋敷の建築図など、様々な種類の絵図面が伝来したものです。

一昨年発足した本学文学部附属永青文庫研究センターにおいて、これらの詳細な資料調査を行い、本年 3 月『永青文庫叢書　細川家文書　絵図・地図・指図編Ⅰ』を編集刊行しました。

すでに『永青文庫叢書　細川家文書　絵図・地図・指図編Ⅰ』で紹介した資料のうち、第 5 回の資料展で「熊本城図」、第 17 回の資料展で「細川家の江戸屋敷」、第 4 回永青文庫セミナーで「肥後藩の国許屋敷」など城下町と大名関係の絵図、武家屋敷については展覧しました。

本展覧会では、今まで公開されなかった城下町から離れた町や村を紹介します。具体的には、肥後国全域を描いた国絵図と巡見使が辿った道筋と景観を描いた街道図を中心に、沿道の町と村にあった御茶屋、寺社、御客屋（町屋）、民家（農家）などの絵図・32 点を公開します。中でも街道図は、筑後三池境の玉名郡岩本口から府本村（荒尾）―高瀬町―味取新町（植木）―熊本―川尻町―宇土町―小川町―八代町―日奈久町―佐敷町―陣町（水俣）などを通り薩摩国へと抜ける全長１７ｍにも達するものなど３道を紹介します。

本展覧会が先に紹介した城下町や武家屋敷と一体となって、当時の肥後国全域の具体的イメージを高めることができれば幸いです。

平成 23 年 10 月

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター特任教授　北野　隆

＊図版キャプションは、（展示番号）「資料名」に続き、作成年（括弧は推定）/員数/法量（cm）/資料番号の順に記した。なお、解説文は北野隆監修のもと、同センター技術補佐員の藤本豊治が執筆した。

（1）「肥後国之図」　　（正保年間以後）/1 鋪 /165.6 × 112.5/45 印 56 番

国絵図は、江戸幕府が諸国の主要大名に命じて作成させた国ごとの地図であり、主に慶長国絵図、正保国絵図、元禄国絵図、天保国絵図がよく知られている。永青文庫には、このうち慶長国絵図、正保国絵図、元禄国絵図が現存する。

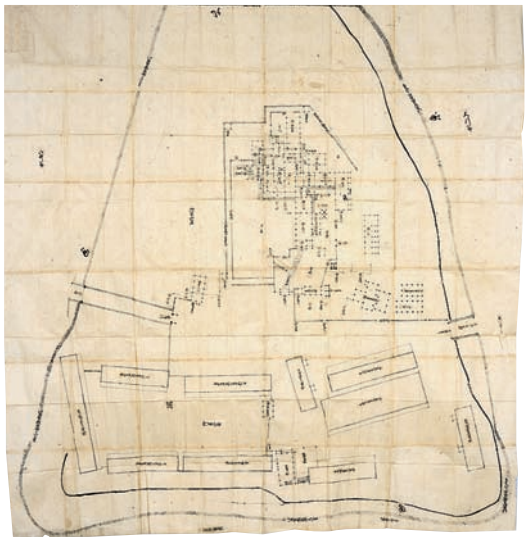
この絵図は、江戸時代中頃に正保国絵図をもとに作成されたと考えられる。しかし、元となった正保国絵図に描かれいる天領の天草郡が省略され、縮尺も 6 寸 1 里（2 万 1600 の 1）から 1.5 寸 1 里（8 万 6400 分の 1）程度に縮小されている点に大きな違いがみられ、郡高や村高なども記されていない。この絵図は、古城や交通路が記され、巡見使の為の絵図と思われる。

〈高瀬－植木－熊本－宇土－八代－水俣〉ルート

（玉名郡岩本口－府本村（荒尾）－高瀬町－木葉町－味取新町（植木町）－新町－古町
－川尻町－宇土町－松橋村－小川町－宮原町－八代－日奈久町－佐敷町－陣町（水俣））

(2)「御巡見衆通過沿道地図」　（延享（1746）3 年）/1 帖 /1.1 × 1703.8/101 の 70 － 1

この絵図は、延享 3 年に肥後国を視察に来た諸国巡見使が通った道筋と沿道の景観を描いたものである。九州巡見使番徳永平兵衛、大御所付小姓組夏目藤右衛門、書院番小笠原内匠の一行は、7 月 16 日に筑後三池境の玉名郡岩本口から肥後国に入り、芦北郡を通って薩摩鹿児島領に抜け、8 月 20 日に日向延岡境の阿蘇郡岩神口から肥後国に再入国して南関を通って筑後柳川領に抜けている。「延享三年六月仕立ての事」とあるので、巡見使の視察に備えて事前に作成されたものである。沿道の村名や道程が表記され、御高札、関所、番所、町屋、神社、山、峠など立体的に描かれる一方、御茶屋や御客屋、寺院などは敷地を単線で示している。また、高瀬町、高橋町、熊本町、川尻町、八代町の五ヶ町は赤くぼかして具体的な町の様子は描かれていない。この絵図は、上記の 2 経路の内、玉名郡岩本口 - 府本村（荒尾）- 高瀬町 - 木葉町 - 味取新町 (植木町)- 新町 - 古町 - 川尻 - 宇土 - 松橋村 - 小川町 - 宮原町 - 八代 - 日奈久町 - 佐敷町 - 陣町（水俣）を描いたものである。

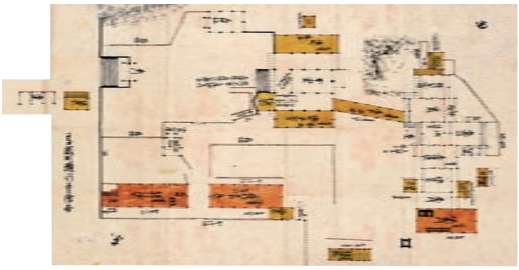


(3)「高瀬御茶屋絵図」　（文政（1828）11 年）/1 鋪 /178.0 × 178.3/8,4,86 丙

高瀬町は熊本藩五ヶ町の一つで、玉名、山鹿 2 郡 8 手永 20 万俵余の年貢米を納める高瀬御蔵があり城北の物資の集散地であった。

この絵図は、高瀬御茶屋の敷地全体を描いた配置図兼平面図である。北側の御殿群が藩主の宿泊や休憩に使用される御茶屋で、南側の敷地は高瀬御蔵であり米蔵が立ち並んでいる。東側の付紙に記された「大川筋」の「大川」とは高瀬川（菊池川）のことで、菊池川流域の年貢米がここに集められた。

文政 11 年 10 月 23 日には、細川家 12 代斉護（なりもり）が内田手永を視察後、高瀬御茶屋に宿泊している。◎格子罫 :6 分計・箆（へら）



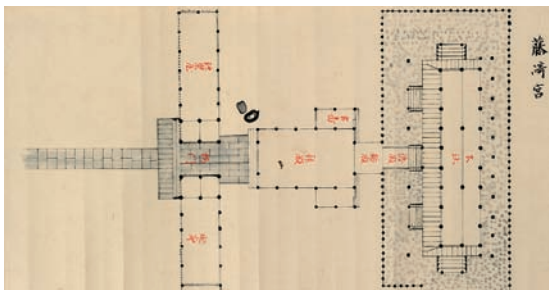
(4)「高瀬町願行寺（がんぎょうじ）絵図」　（寛政（1795）7 年）/1 鋪 /42 × 74.5/8,4, 丁 32

江戸時代には、時宗の高僧が修行や勧進のため諸国を巡り歩いており、遊行上人と呼ばれた。寛政 7 年 3 月 15 日に高瀬を発って、熊本の宿坊である阿弥陀寺に入っている。この絵図は、その時に高瀬町での宿坊に使われた願行寺の配置図兼平面図である。

萱葺（かやぶき）が茶色、鳥（取）葺が黄色、瓦葺は無着色、また石敷が薄墨で塗り分けられている。さらに、朱線の引かれた所には、遊行上人下之居所、仮台所、仮湯殿、仮番所、幕張、葭垣などと記されており、遊行上人を迎えるにあたり設えた箇所と考えられる。◎格子罫 :6 分計・箆（へら）

(5)「熊本城東面図」　(明治期)/1 鋪 /62.3 × 110.4/1026 の内

熊本城が描かれた鳥瞰図は、南側（御花畑屋敷）から見たものをはじめ、北西側（京町）、南東側（高田原）からのものが良く知られているが、この絵図は東側（厩橋・手取町）から見たものである。東（下）側に流れる坪井川に架かる二つの橋のうち左側の木造の橋が厩橋である。南（左）は御花畑屋敷、北（右）は棒安坂までを描いており、背景の一番高い山が金峰山である。筆者は、右下隅の落款より赤星閑意であり、明治 21 年に没した。



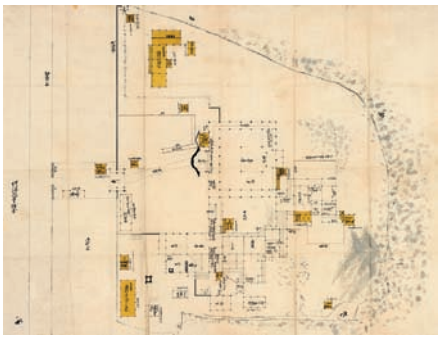
(6)「寺社絵図」　(江戸時代後期)、1 巻 /30 × 429.6/14,21, 乙ノ 5

熊本の主要な寺社の平面図を巻子に仕立てたもので、江戸時代後期の神護寺、藤崎宮、祇園宮、六所宮、泰勝寺、妙解寺、往生院、本妙寺、本妙寺御位牌所が収録されている。平面図は全て同じ縮尺で部屋名を朱で、石敷や玉砂利は薄墨で、さらに建具や柱の表記も統一した表記で描かれている。◎格子罫 :5 分計・篦

(7)「藤崎宮祭礼之図」

(江戸時代末期)/1 巻 /53 × 1026.2/212 の 15

藤崎八幡宮で毎年9月に行われる祭礼の様子を描いたものである。「寺社絵図」に記された寺社のうち藤崎宮と六所宮の外観が立体的に描かれている。江戸時代末期の絵図と思われる。

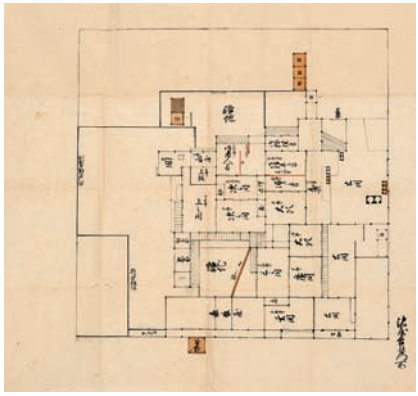


(8)「熊本阿弥陀寺絵図」　(寛政 7 年)/1 鋪 /113.6 × 87.5/8,4,60, 丁

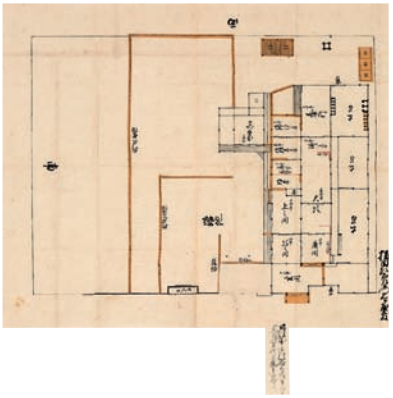
寛政 7 年 3 月 15 日に高瀬を発った遊行上人は、熊本の宿坊である阿弥陀寺に入った。この絵図は、この時の阿弥陀寺の配置図兼平面図である。

図（4）「高瀬町 願行寺絵図」と比べると、屋根材による塗り分けはなく萱葺も鳥（取）葺も黄色で着色されているが、その他は描写方法も表記内容もよく一致するので、この絵図も遊行上人を迎えるにあたって作成されてものと考えられる。

なお、阿弥陀寺には「御家老衆江上人対面之間」と記された部屋があり、遊行上人と熊本藩の家老との対面が行われた。◎格子罫 :6 分計・篦



(9)「沢屋吉左衛門所」
(延享 3 年)/1 鋪 /61.5 × 58.1/8,4,36 丁 -2



(10)「指田次郎左衛門上ケ屋敷」
(延享 3 年)/1 鋪 /53.6 × 63.2/8,4,36 丁 -1

延享 3 年 7 月に熊本を訪れた巡見使の宿は、新町の沢屋吉左衛門、指田次郎左衛門、高塚屋安左衛門の屋敷が当てられた。これらの絵図は、各屋敷の平面図である。図（10）「指田次郎左衛門上ケ屋敷」には、「この絵図のように改築するように指示されたので、経費を計上した」という旨の付紙が貼られてあり、薄茶色の紙が貼られたところが改築された箇所と思われ、朱線は屏風を配する位置を示している。

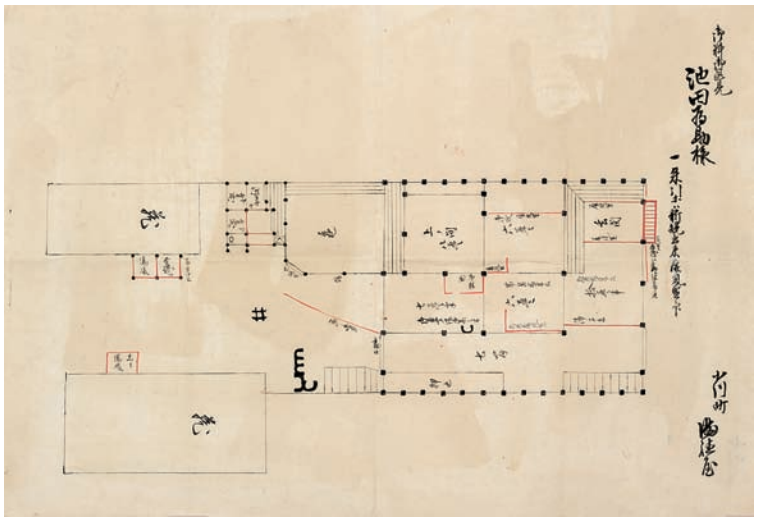
また、図（9）の沢屋吉左衛門の屋敷には、延享 3 年 7 月に細川家 7 代宗孝が直接出向き巡見衆と接見している。そのため、藩主用の御成門が設けられ座敷には上段が作られている。◎格子罫 :8 分計・篦

（11）「川尻御茶屋絵図」　　**（天保3年（1832））/1 鋪 /301.1 × 172.4/8,4,32, 乙**

川尻町は熊本藩の五ヶ町の一つで、飽田・詫麻・益城・宇土の4郡18手永20万俵の年貢米を納める川尻御蔵があり城南の物資の集散地であった。

この絵図は、川尻御茶屋の敷地全体を描いた配置図兼平面図である。建物は、屋根葺き材などにより塗り分けられ、薄墨色が瓦葺、黄が柿葺（こけらぶき）と葭垣（よしがき）、茶色が萱葺（かやぶき）である。庭園の東側に建つ瓦葺（薄墨色）の御殿が藩主の宿泊や休憩に使用される御茶屋で、さらに東側にある萱葺（茶色）の建物は町奉行の役宅などである。南側の敷地は川尻御蔵となっており米蔵が立ち並んでいる。この敷地のすぐ南側に緑川が流れ船着き場があった。このように、川尻御茶屋は御茶屋だけでなく、町奉行所と川尻御蔵が併設されていた。

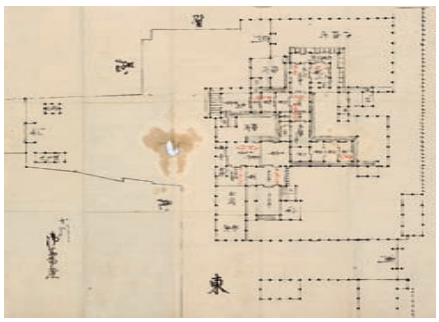
絵図に年代はないが、天保3年の絵図では西側の御木材蔵前の堀と南側の番所前の堀が埋められ、南側に東門や西門が設けられているから、それ以前の様子を表している。



（12）「御料御巡見　池田為助様 小川町　満徳屋」
（天保9年（1838））/1 鋪 /39.1 × 57.1/14,21, 丙 8 － 4

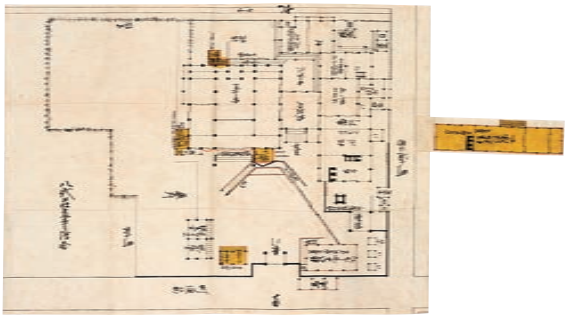
天保9年閏4月に御料御巡見使が肥後国南部を訪れた。このとき巡見使の休憩や宿泊に使われた御茶屋や御客屋、民家などの平面図が残っている（図（12）、（15）、（16）、（19）-（22））。これらは、柱や建具の表記には多少ばらつきがあるが、いずれも巡見使が使用する際の部屋割りや増改築箇所、屏風や幕など臨時の設え等を主に朱で示している。

この絵図は、小川町の満徳屋の平面図で巡見使の池田為助が使用している。図中に「一、朱引等ハ新規出来屏風置之印」と記されているように、巡見使の使用に際して整えられた箇所を朱で、その内容を墨書きで示している。◎格子罫:1寸計・箆（へら）



(13)「小川御茶屋」　（天保（1838）9年）/1 鋪 /38.6 × 53.7/8,4,64, 丁

小川御茶屋の配置図兼平面図であるが、敷地の周辺部分は省略され描かれていない。平面図には、「上ノ間」、「侍分認所」、「末々認所」、「御用人間」などと朱で記入されているから、巡見使が小川御茶屋に休泊するに当たり、御供の侍を含めての部屋割りを記したものと考えられる。◎格子罫：4分計・篦（へら）

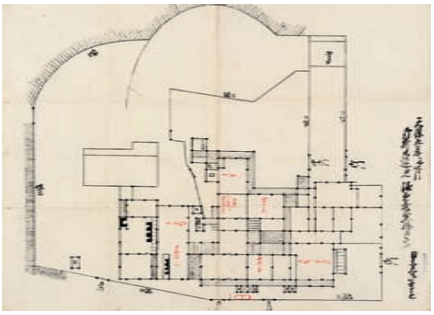


(14)「八代町　荘厳寺（しょうごんじ）絵図」

（寛政（1795）7年）/1 鋪 /43.4 × 59.5/8,4,62, 丁

寛政7年3月25日、遊行上人は熊本を発ち八代へ向かった。この時に八代での宿坊となった荘厳寺の配置図兼平面図である。図（4）「高瀬町　願行寺絵図」と図（8）「熊本阿弥陀寺絵図」、と描写方法も表記内容もよく一致するので、この絵図も遊行上人を迎えるにあたって作成されてものと考えられる。

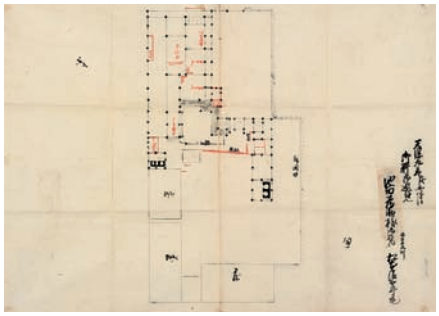
◎格子罫：6分計・篦（へら）



(15)「御料御巡見　渥美武左エ門様御宿 日奈久御茶屋」

（天保（1838）9年）/1 鋪 /65.5 × 47.2/14,21, 丙 8 − 7

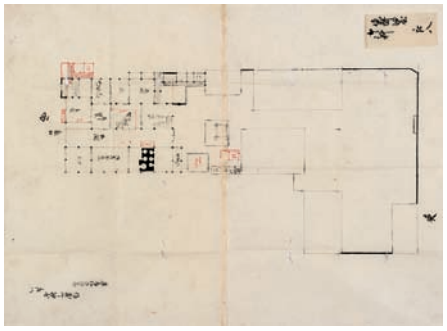
図（12）と同様に、天保9年閏4月の御料御巡見使の渥美武左衛門の御宿として使用された日奈久御茶屋の平面図である。朱書きで部屋割りが記されているが、増改築や臨時の設えを示す朱線はほとんどみられない。御茶屋であったため、もともと必要な機能が十分に備わっていた為と考えられる。



(16)「御料御巡見　池田為助様御宿　日奈久町　松本清三郎宅」

（天保（1838）9年）/1 鋪 /66.2 × 47.5/14,21, 丙 8 − 8

図（12）と同様に、天保9年閏4月の御料御巡見使の池田為助の御宿として使用された日奈久町の松本清三郎宅の平面図である。



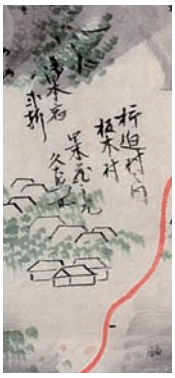
(17)「近藤様御泊宿　佐敷町　油屋　庄八」

（天保（1838）9年）/1 鋪 /63.3 × 46.3/14,21, 丙 8 − 6

図（26）と同様に、天保9年の諸国巡見の近藤勘七郎の御宿として使用された佐敷町の油屋庄八宅の平面図であるが、付紙に「御料」と記されているので、御料巡見でも利用された可能性がある。◎格子罫：6分計・篦（へら）

〈宮原－種山－柿迫－岩奥〉ルート

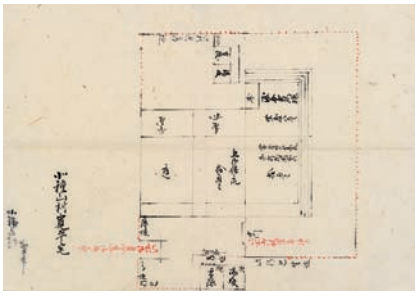
（早尾～南種山～北種山～柿迫～白岩戸～岩奥～板木）



（18）「御料御巡見衆五ケ庄へ御通行道筋略図　種山」　**（天保10年）/1 鋪 /27.5 × 851.7/8,4,35, 丁**

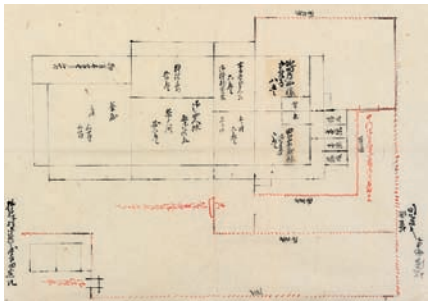
この絵図は、天保９年閏４月に五家荘へ視察に来た御料御巡見使が通った道筋と沿道の景観を描いたものである。五家荘への道筋は、豊後街道沿いの早尾村から南種山村－北種山村－下嶽村－柿迫村（白岩戸村－岩奥村－板木村）を通って五家庄の椎原村へ入っている。この絵図では、五家荘椎原村の手前の板木村までしか描かれていない。「天保九年閏四月御通行、同十年五月出来」と記されているから、巡見使の視察後に作成されたことがわかる。このときの御料御巡見使は、渥美武左衛門、池田為助、田口岩蔵であった。

巡見使の通った道は朱色で、橋は黄色、川は青色で描かれ、民家や神社、御客屋、橋などは立体的に描いている。また、沿道の村名に加え、巡見使の休憩や宿泊に使用された御客屋と民家の名称が記されており、これらの平面図がこの絵図とは別に残されている。この絵図に記された御客屋と民家は、北種山村御本宿（奥田久左衛門所、寛平所、民門形右衛門所）、柿迫村御昼休（御客屋片山源十郎所）、岩奥村御本宿（那須長七所）、板木村御本宿（黒木蔵之允、久左衛門所）である。



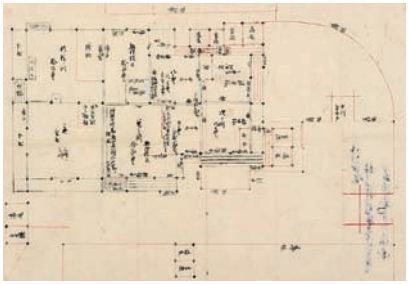
（19）「北種山村　寛平宅」
（天保9年）/1 鋪 /26.7 × 38/14,21, 丙８－12

（12）と同様に、天保９年閏４月の御料御巡見で渥美武左衛門の御本宿として使用された北種山村の寛平宅の平面図である。墨書きで部屋割り等が記され、朱の点線で幕、垣の位置が示されている。図（17）には、「御本宿寛平所」と記されている。



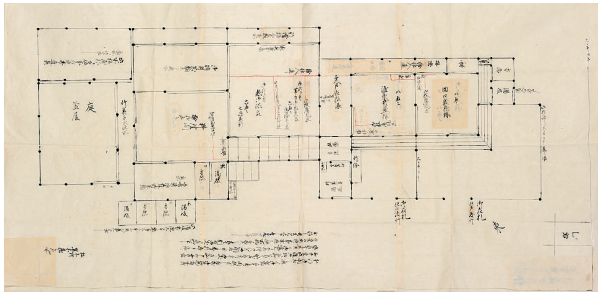
（20）「柿迫村御客屋　吉田達次」
（天保9年）/1 鋪 /38.1 × 26.8/14,21, 丙８－15

（12）と同様に、天保９年閏４月の御料御巡見で池田為助と田口岩蔵の御昼休に使用された柿迫村の御客屋吉田達次の平面図である。墨書きで部屋割り等が記され、朱の点線で幕、垣の位置が示されている。ここでは、１軒を２名の巡見使とその家来達で使用している。



（21）「御泊所　柿迫村ノ内岩奥 御客屋並白石源兵衛自宅絵図」
（天保9年）/1 鋪 /30.4 × 44.2/14,21, 丙８－13

（12）と同様に、天保９年閏４月の御料御巡見で渥美武左衛門と田口岩蔵の御本宿に使用された岩奥村の御客屋並白石源兵衛自宅の平面図である。ここでは、田口様と記された部屋に新たに置床が設けられている。

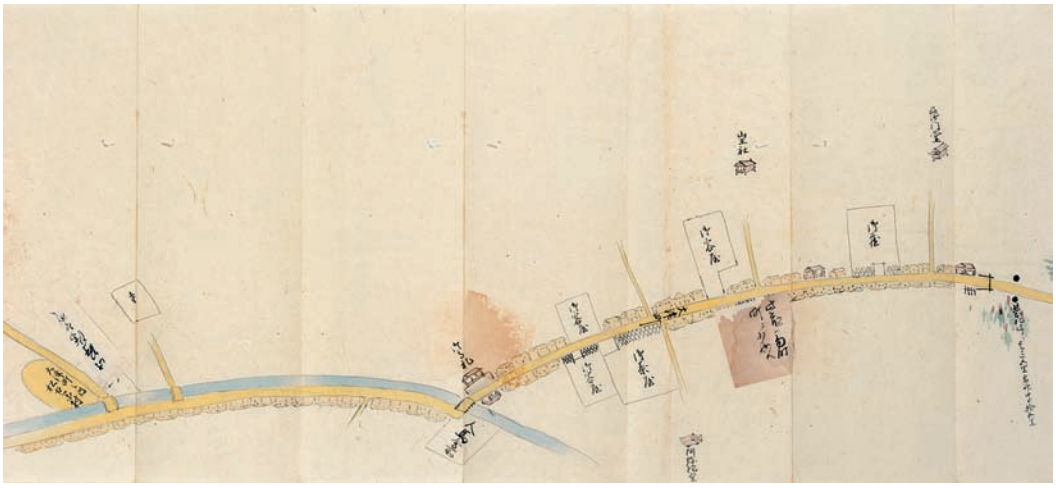


（22）「種山手永板木村　黒木蔵之允居宅御間取之図」
（天保9年）/1 鋪 /44.5 × 90.7/14,21, 丙８－17

（12）と同様に、天保９年閏４月の御料御巡見で渥美武左衛門と田口岩蔵の御本宿に使用された板木村の黒木蔵之允居宅の平面図である。ここでは、渥美武左衛門様と記された部屋に置床が新たに設えられている。以上の例から、巡見使の部屋には必ず床が必要であったようで、床のない部屋には置床で対応している。

〈高森－坂梨－内牧－大津－菊池－山鹿－南関〉ルート

（阿蘇郡岩上口－高森町－坂梨村－内牧村－二重峠－大津町
－隈府町－新町（来民）－湯町（山鹿町）－肥猪町－南関町）



（23）「〔御巡見衆通過沿道地図〕」　**（延享（1746）3年）/1帖/30.9 × 1104.8/101の70－2**

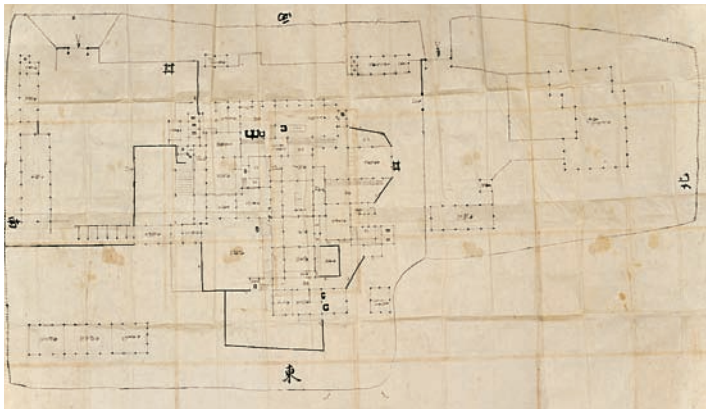
この絵図は図（2）と同じく、延享3年に肥後国を視察に来た諸国巡見使の辿った道筋と沿道の景観を描いたものである。一行は、7月16日筑後三池境の玉名郡岩本口から肥後国に入り、芦北郡を通って薩摩鹿児島領に抜け、8月20日に日向延岡境の阿蘇郡岩神口から肥後国に再入国して南関を通って筑後柳川領に抜けている。この絵図は、上記の2経路の内、阿蘇郡岩神口－高森町－坂梨村－内牧村－二重峠－大津町－隈府町－新町（来民）－湯町（山鹿町）－肥猪町－南関町を描いたものである。

（24）「内牧御茶屋絵図」

（江戸時代後期）/1鋪/134.5 × 130.2/8,4,84丙

内野牧御茶屋の敷地全体の配置図兼平面図である。敷地の規模については、「惣畝数　壱町弐反弐畝弐拾歩、御囲廻り惣間数　弐百四十五間」と記されている。御茶屋の表御門から南側の町筋までは、44間（約80m）離れた場所にあり、『肥後国誌』には内牧城の跡地と記されている。

文化六年（1809）の焼失後に再建された内牧御茶屋を描いていると思われる。◎格子罫：6分計・篦（へら）

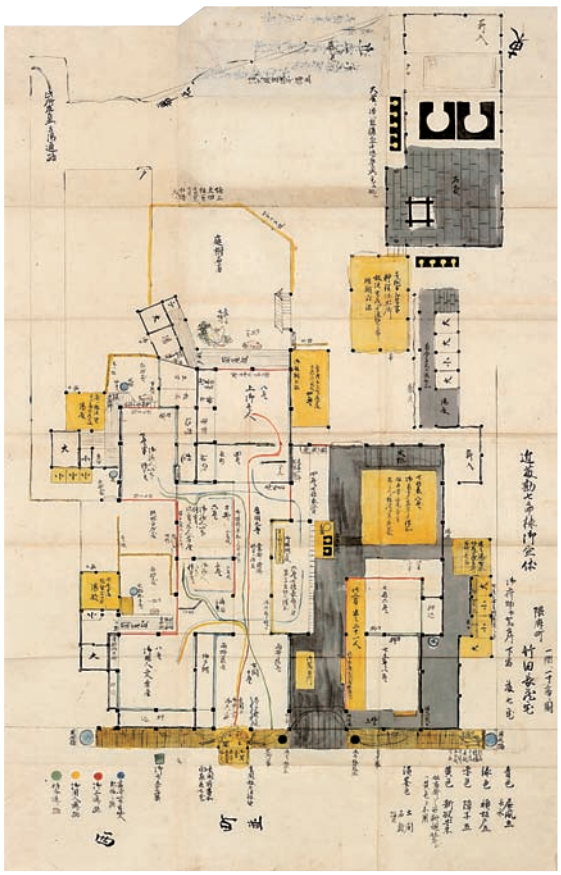


（25）「大津御茶屋」

1鋪、174.5 × 104.9、（文政（1828）11年）、8,4,87丙－2

大津町は豊後街道の宿場町で、大津手永、竹迫手永の一部、阿蘇郡の10手永16万俵余の年貢米の集積地でもあり大津御蔵が設けられていた。

この絵図は、大津御茶屋の敷地全体を描いた配置図兼平面図である。南側の区画が藩主の宿泊や休憩に使用される御茶屋で、北側の区画には御茶屋番居宅や御物蔵が置かれ、西側は豊前街道に面していた。大津御蔵は、大津御茶屋とは別に離れた場所に設けられていた。大津御茶屋は文政11年に移転した。移転後のものと思われる。◎格子罫：1寸計・篦（へら）

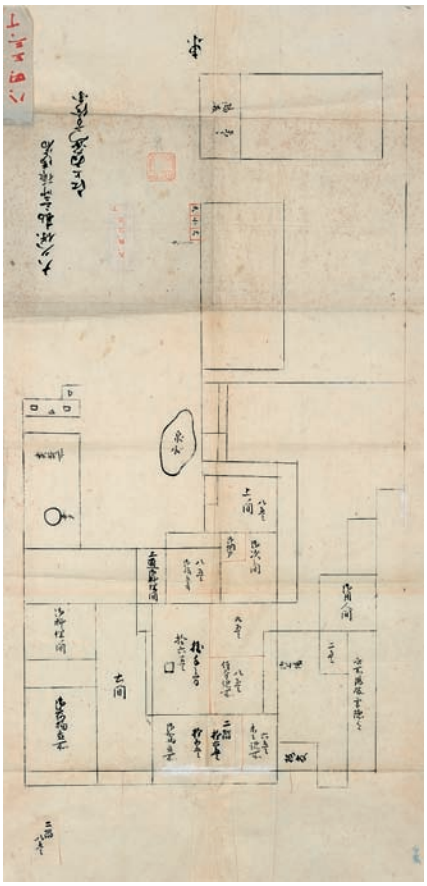


（26）「近藤勘七郎様御昼休　菊池郡隈府町　竹田長蔵宅絵図」

（天保 9 年（1838））/1 鋪 /89.2 × 57.8/8,4,4 ノ乙

天保九年に肥後国を訪れた諸国巡見使は、西国巡見使番曾我又左衛門、大将附小姓組大久保勘三郎、書院番近藤勘七郎であった。このとき巡見使の休憩や宿泊に使われた御茶屋や民家の平面図が残っている（図（17）、（26）、（27）、（28））。

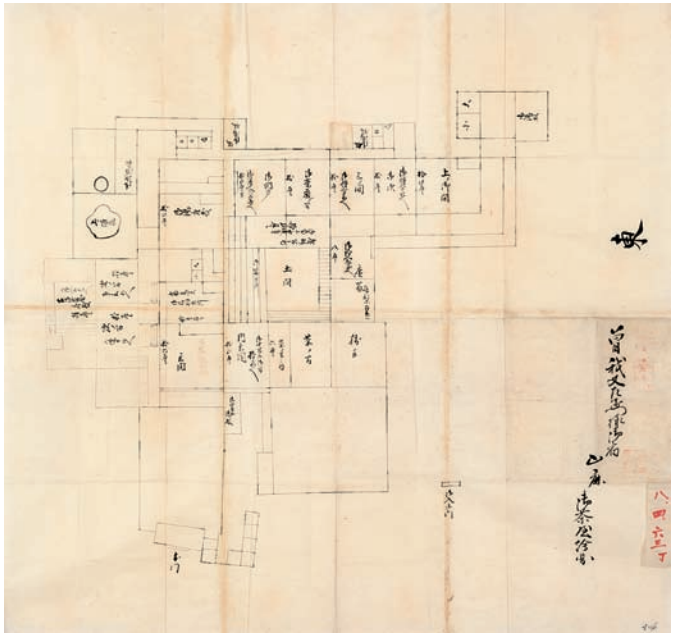
この絵図は隈府町の竹田長蔵宅の平面図で、近藤勘七郎の御昼休に使用されている。黄色に塗られた部分は、新たに増改築されたところで、青色は屏風、緑色は襖板戸、赤色は障子や建具と臨時の設えを示している。薄墨色は、土間や石敷である。また、これらとは別に身分別の動線（通路）が青、赤、黄、緑で記されている。◎縮尺：「一間ニ一寸三歩ノ図」



（27）「大久保勘三郎様御宿 江上為右衛門方絵図」

（天保 9 年（1838））/1 鋪 /93.5 × 45.6/8,4,33, 丁

この絵図は江上為右衛門方の平面図で、「大久保勘三郎様御宿」と記されているので、天保九年の巡見で御宿に使われた。朱で記されたところは、他の例と同様に増改築された場所や屏風などの臨時の設えを表していると考えられる。

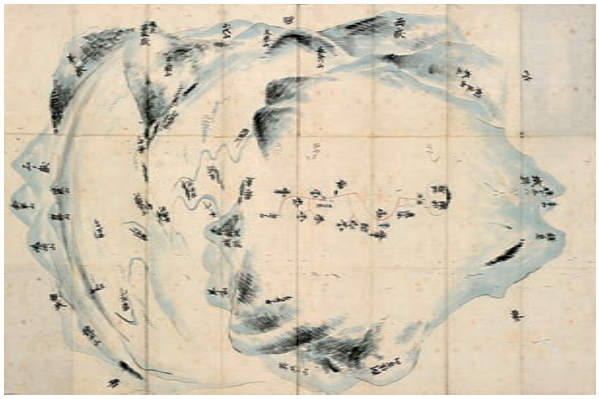


（28）「曽我又左衛門様御宿　山鹿御茶屋絵図」

（天保 9 年（1838））/1 鋪 /90.5 × 86.2/8,4,63 丁

この絵図は山鹿御茶屋の平面図で、「曾我又左衛門御宿」と記されているので、天保九年の巡見で御宿に使われた。部屋名とは別に部屋割りが記されている。「上ノ温泉」、「御次温泉」、「御湯座敷」など、湯町と称された山鹿ならではの施設がみられる。

〈その他〉（菊鹿・合志・甲佐・御船）

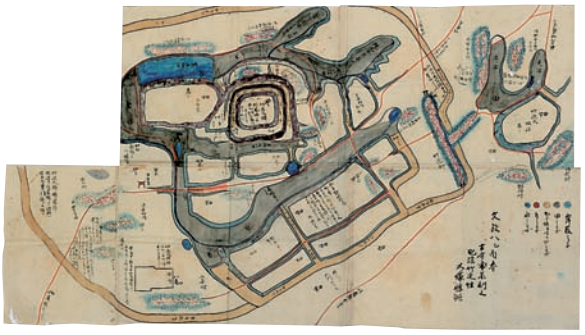


(29)「隈部古館略図」（文政11年（1828））/1鋪/77.1×51.3/8,4,乙3

この絵図は、山鹿市菊鹿町上永野に所在する国指定重要文化財（史跡）の隈部氏館跡を中心に周辺の景観を描いたものである。隈部氏館は標高345m前後の山腹にあり、北東側の背後には高山（標高682.4m）と猿返し山（標高626.8m）がそびえ立ち、山腹の館と山頂の砦で構成される一つの城館（猿返城）であった。隈部氏は、菊池氏の有力家臣で戦国時代にこの地域を広く治めていた。

この絵図は、山腹の隈部氏館跡からぐるっと360°見渡した眺望を描いているようで、実際に現地に赴くと、その様子がよく表現されていることがわかる。南から西の方には、御城（熊本城）や金峰山、小岱山、遠くは島原の温泉嶽（雲仙岳）が描かれている。

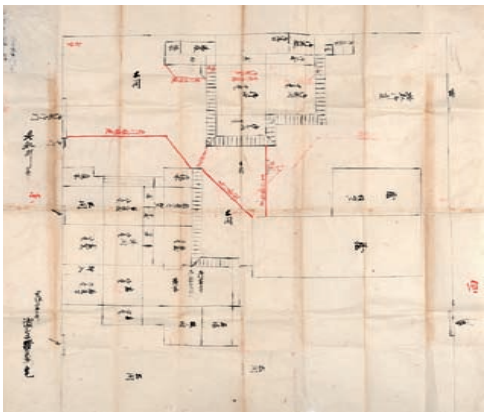
文政11年（1828）10月20日に、細川家12代斉護（なりもり）が隈部館跡を見学しており、当時から名所旧跡として知られていた。このときの視察の為に作られたと考えられる。



(30)「合志古城図」（文政8年（1825））/1鋪/106.9×60.2/25,11,1

この絵図は、熊本県合志市上庄にある竹迫城公園一帯にあった竹迫城と呼ばれるものを描いたものである。文政年間に筑後竹迫氏の要請によって中世竹迫氏の業績をまとめた『竹陽古今考』と同時に作製され、竹迫氏に献呈された絵図の写しと考えられている。残存する遺構とかなりの部分が整合することから、現地踏査を踏まえたほぼ正確な略側図である。

また、この資料の永青文庫への伝来については、筑後竹迫氏から『竹陽古今考』の作成依頼を受けたのが、熊本藩の家老である米田（長岡）是容に仕えていた久野正頼と考えられ、この久野正頼を通じて藩に伝来したと考えられている。



(31)「甲佐岩下町　渡辺猪左衛門宅図」
（寛保2年（1742））/1鋪/71.8×61.2/284

甲佐町には築場が設けられ、藩主やその一族が訪れている。元禄2年（1689）には築場に設けられていた御茶屋が廃止され、それ以降は民家が使用された。この絵図は、甲佐岩下町の渡辺猪左衛門宅の平面図で、御成御門や御成間があるので藩主が訪れていたと思われる。朱で記されたところは、仮塀や幕、仮御門などで藩主御成の際に臨時に設けられたものと考えられる。

寛保二年（1742）に細川家7代宗孝（むねたか）、慶応元年（1865）に顕光院（けんこういん）（12代斉護正室）と鳳台院（ほうだいいん）（12代斉護（なりもり）長男慶前（よしちか）正室）が甲佐の築場を訪れている。

(32)「木倉（きのくら）手永絵図」　1鋪/60.4×113.0/101の77

御船町（木倉手永）にある七滝は古くから信仰の対象となっており、滝の巌上に建つ七滝神社は滝を御神体として祀ったのが始まりとされている。貞享3年（1686）に細川家5代綱利（つなとし）が荒廃していた神社を再建しており、歴代の細川藩主もよく七滝見物に訪れていたようである。慶応元年（1865）には顕光院（12代斉護正室）と鳳台院（12代斉護長男慶前（よしちか）正室）が甲佐の築場と共に七滝を訪れている。

この絵図は木倉手永を描いた地図であり、鯰（なまず）手永境から矢部手永境までを描いている。道や川、山、橋、坂などの他、御本宿、御小立、七滝およびその御覧所などが図示され、熊本からの道程や要所要所からの御本宿、御小立、御覧所までの道程が記されている。以上のことから、この絵図は主に七滝見物の為に作成されたと思われる。

※ 出品作品は全て公益財団法人永青文庫所蔵のもので、「熊本城東面図」を除き熊本大学附属図書館寄託品である。

第 28 回熊本大学附属図書館貴重資料展

永青文庫資料にみる

肥後の街道とその景観

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター　編著

平成 23 年 10 月刊　熊本大学附属図書館

本目録の無断転載・複製を禁ずる。